高校野球部員の指導者に対する「信頼感」に関する研究
：野球部への「適応感」との関連に着目して

スポーツ文化領域

5019A049-2　徳島有樹　　研究指導教員：武藤　泰明　教授

＜問題の所在と目的＞

現在，運動部活動において，様々な問題が山積しており，その中でも，部員-指導者関係におけるハラスメントや体罰などの倫理的諸問題に対して，早急な解決が求められている．このような状況下で，部員-指導者関係の在り方が問い直され，両者間における信頼関係の構築が重要視されている（文部科学省，2013）．部員-指導者関係については，これまで様々な観点から議論されているが，適切な指導や部活動を円滑に運営する上で，部員が指導者に対して好意的な感情と「信頼感」を抱いていることが重要であるとされている（松井，2014）．

そして，数多の高校部活動の中でも，本研究は「野球部」に焦点を当てて，「高校野球部員の指導者に対する『信頼感』の実態」に着目する．わが国において高校野球は，歴史的背景や社会的支持の大きさ，高野連への登録人数などにより，大規模に成立している．一方で，看過できない程の不祥事が報告されており，様々な問題を孕んでいる．また，部員の心理的な側面に関してネガティブな影響が報告されていることを踏まえれば，高校野球部員を対象とした心理的側面に着目した研究が必要と言えよう．

本研究の問題意識との関連から，先行研究を批判的に検討したところ，高校野球部員の指導者に対する「信頼感」の実態をより明らかにする上で野球部への「適応感」との関連に着目することとした．しかしながら，「信頼感」と「適応感」の因果関係までは言及できないため，本研究においては，野球部員の指導者に対する「信頼感」と「野球部への適応感」の関連を相関分析にて検討していく．

これらを踏まえて，本研究の目的は，「高校野球部員の指導者に対する信頼感尺度」の開発を通して，部員-指導者間の「信頼感」の実態を明らかにし，「野球部への適応感」との関連を検討することである．

＜第１章＞

本章では，予備的考察として，心理社会的発達段階の視点から，高校生年代の心理的課題や心理的特徴を踏まえて，青年期に「信頼感」を獲得する意義について検討した．さらに，高校生にとって運動部活動がどのような役割を果たしているのかを検討するために，教育上の意義や効果，高校生を対象とした部活動に関しての調査を確認した．最後に，高校野球の実態を踏まえて，高校野球における部員-指導者関係を取り巻く構造について検討した．その結果，以下の諸点が明らかになった．

1）高校生年代は，エリクソンの漸成理論において青年期に該当し，「アイデンティティ対アイデンティティの拡散」が心理社会的発達課題となる．これらは互いに影響し合って顕在化するものであり，誰しもが「アイデンティティの拡散」を経験し，あらゆるネガティブな心理的側面と向き合いながら，アイデンティティを確立させていく．これらの課題の克服に「特定の他者への信頼感」は，アイデンティティの観点からも重要な役割を果たし，青年期において「特定の他者」に「信頼感」を確立することは意義があることだと言える．また，青年期にアイデンティティを確立させることによって，その後の生き方は安定したものになりやすいことも示唆されている．

2）高校の運動部活動は，2020（令和２）年において，約４割の高校生が在籍しており，試合やコンクールで結果を出すことに傾倒しつつも，多様なニーズが求められていることが確認された．また，部活動の受け入れ態勢の柔軟性が求められており，徐々に環境が整ってきている段階であると言えよう．教育の一環として，位置づけられている運動部活動において，実際に多面的な効果が認められている．この背景には，１つの部活動集団の中にも，学年や性差，試合への出場機会の違いなどにより，多様な部員が在籍しており，「多様な他者」と相互に作用しながら，成長していく様子が窺い知れる．これらのことを踏まえると，高校生は運動部活動を多義的な居場所と捉えていると考えられる．

3）高校野球における部員-指導者関係を取り巻く構造について検討するために，学生野球を中心とした野球における発展の流れや部員数などによる成立規模，朝日新聞の世論調査を基にした社会からのまなざし，部員-指導者関係に関係する不祥事などを取り上げ，高校野球の現状について確認した．そして，これらを踏まえて，高校野球において，指導者が権威的な存在であるトップダウン式の構造が色濃く残っており，過度な勝利至上主義を背景にした凝集性の高さや，指導者の問題行動に対して盲目したり，受容したりする部員の姿から，高校野球部は，「指導者崇拝的なトップダウン式の構造」を含む集団と考えられる．

＜第２章＞

第２章の目的は，「高校野球部信頼感尺度」を開発し，高校野球部員が指導者に抱く「信頼感」の因子構造を明らかにすることであった．

予備調査を行った後，26 校の高校の野球部（公立 16 校，私立 10 校）において本調査を実施した．そのうち，記入漏れや記入ミスのあったものを除き，有効回答者 737 名（1 年生 377 名，2 年生 320 名，3 年生 40 名）を分析の対象とした（回収率 92.5%）．

探索的因子分析を行った結果「親しみやすさ」，「野球への情熱的な態度」，「適切な支援」の 3 因子が抽出され，この 3 因子 12 項目から構成される尺度を「高校野球部信頼感尺度」とした（表 1）．この尺度は，Cronbach の α 係数による内的一貫性（α =.90 以上）と再検査法による時間的安定性（r=.73 から r=.81）も確認できたことから，十分な信頼性が保証されていると言えよう．さらに，基準関連妥当性の検証により，一定程度の妥当性についても確認された．また，部員の属性の違いによる比較を行ったところ，高校２年生や準レギュラー，部内における役職無しの部員において，指導者への「信頼感」を抱きにくいことが明らかになった．

表 1．高校野球部員の指導者に対する信頼感尺度の因子分析結果（Promax 回転）と因子間相関

項目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ 親しみやすさ（α=.90）			
指導者は、部員の提案に耳を傾けてくれます	**.88**	.01	.02
指導者は、部員の意見を尊重してくれます	**.85**	.07	-.04
指導者は、気軽に相談に乗ってくれます	**.80**	-.03	.03
指導者は、自分の否を認めることができます	**.60**	.03	.21
指導者は、ハラスメントをしません	**.45**	.24	.08
Ⅱ 野球への情熱的な態度（α=.91）			
指導者は、野球を愛しています	-.04	**.94**	-.01
指導者は、熱心に指導してくれます	.04	**.82**	.06
指導者は、常にやる気があります	.15	**.63**	.12
Ⅲ 適切な支援（α=.92）			
指導者は、明確な根拠を持って指導してくれます	-.01	.08	**.86**
指導者は、わかりやすく教えてくれます	.21	.13	**.58**
指導者は、今後の人生に良い影響を与えてくれます	.16	.21	**.52**
指導者は、人生を見据えた指導をしてくれます	.12	.25	**.52**
因子間相関 Ⅰ	－	.74	.81
因子間相関 Ⅱ		－	.83
因子間相関 Ⅲ			－

表 2．野球部への適応感尺度の因子分析結果（Promax 回転）と因子間相関

項目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
Ⅰ 友情の構築（α=.87）				
私は、仲間を心から応援できていると思います	**.91**	.04	-.12	.03
私は、仲間の実力を認めています	**.64**	.02	.23	-.12
私は、様々な困難を仲間と力を合わせて乗り越えています	**.61**	.03	.10	.17
私は、仲間と隔たりの無い関係を作れていると思います	**.53**	.04	.11	.17
Ⅱ 野球への傾慕（α=.90）				
私は、グラウンドに立つとワクワクします	.01	**.80**	.05	-.01
私は、「本気の野球」ができています	.01	**.67**	.05	.13
私は、野球を心から楽しめていると思います	.03	**.60**	-.03	.26
私は、白球を無我夢中に追いかけています	.25	**.52**	.17	-.04
Ⅲ 居心地の良さ（α=.87）				
私には、居場所があると思います	.14	-.14	**.76**	.13
私には、明確な目標があります	-.05	.26	**.64**	-.06
私は、雰囲気良く活動できていると思います	.09	.16	**.58**	.02
私は、目標に合った練習ができていると思います	-.01	.14	**.46**	.22
Ⅴ 成長の実感（α=.80）				
私は、技術の上達を感じています	.07	.07	.04	**.66**
私は、精神力の向上を感じています	.02	.13	.07	**.65**
私は、野球理論が理解できていると思います	.05	.18	.05	**.41**
因子間相関 Ⅰ	－	.74	.78	.77
因子間相関 Ⅱ		－	.77	.79
因子間相関 Ⅲ			－	.77
因子間相関 Ⅳ				－

表 3．高校野球部信頼感尺度と高校野球部適応感尺度の関連

		高校野球部適応感尺度			
		友情の構築	野球への傾慕	居心地の良さ	成長の実感
高校野球部信頼感尺度	親しみやすさ	.57 ***	.57 ***	.58 ***	.21 ***
	野球への情熱的な態度	.67 ***	.57 ***	.62 ***	.32 ***
	適切な支援	.64 ***	.59 ***	.62 ***	.24 ***
両尺度全体の相関		.69**			

$^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$

＜第 3 章＞

第 3 章の目的は，「野球部への適応感尺度」を開発し，高校野球部員の指導者への信頼感と野球部への適応感との関連を明らかにすることであった．

予備調査を行った後，26 校の高校の野球部（公立 16 校，私立 10 校）において本調査を実施した．そのうち，記入漏れや記入ミスのあったものを除き，有効回答者 737 名（1 年生 377 名，2 年生 320 名，3 年生 40 名）を分析の対象とした（回収率 92.5%）．

探索的因子分析を行った結果，「友情の構築」，「野球への傾慕」，「居心地の良さ」，「成長の実感」の 4 因子が抽出され，この 4 因子 15 項目から構成される尺度を「高校野球部適応感尺度」とした（表 2）．この尺度は，Cronbach の α 係数による内的一貫性（α =.80 以上）と再検査法による時間的安定性（r=.69 から r=.78）も確認できたことから，十分な信頼性が保証されていると言えよう．さらに，構成概念妥当性の検証により，一定程度の妥当性についても確認された．また，部員の属性の違いによる比較を行ったところ，高校 2 年生や準レギュラー，部内における役職無しの部員において，野球部へ適応しにくいことが明らかになった．

最後に，高校野球部信頼感尺度と高校野球部適応感尺度の関連を明らかにするために，両尺度の相関係数を算出した．その結果，高校野球部信頼感尺度と高校野球部適応感尺度の全ての下位尺度において，弱～中程度の有意な正の相関関係が認められた（表 3）．

「親しみやすさ」は，「友情の構築」（r=.57，p<.001），「野球への傾慕」（r=.57，p<.001），「居心地の良さ」（r=.58，p<.001），「成長の実感」（r=.21，p<.001）との間に有意な正の相関を示した．「野球への情熱的な態度」は，「友情の構築」（r =.67，p <.001），「野球への傾慕」（r=.57，p<.001），「居心地の良さ」（r=.62，p <.001），「成長の実感」（r=.32，p<.001）との間に有意な正の相関関係が認められた．「親しみやすさ」は，「友情の構築」（r=.64，p <.001），「野球への傾慕」（r=.59，p<.001），「居心地の良さ」（r =.62，p<.001），「成長の実感」（r=.24，p<.001）との間に有意な正の相関を示した．尺度全体としては，両尺度において，（r=.69，p <.001）の有意な正の相関関係が認められた．

＜結章＞

本研究の結果から，高校野球部員の指導者に対する「信頼感」は，部員の個人的な心理的要因である部活動への「適応感」と関連を受けて変化する可能性が明らかになった．この結果から，部員-指導者関係は従来指摘されてきた，指導者側の資質や能力に代表されるように，指導者の信頼性に対する部員の認知だけではなく，既述のような部員の個人的な心理的要因も関連していることが明らかになった．そのため，部員-指導者関係は，単なる二者間の関係性だけでは捉えられない可能性がある．

また，部内において多様な他者が存在していることを認識し，青年期の心理的課題や特徴を踏まえた上で，関係構築を行う必要性がある．本研究で明らかになった高校野球部員の指導者に対する信頼感を高めるためには，3 因子それぞれに対応した，指導方法や仲間との関わりが重要であろう．

高校生年代において「特定の他者」に信頼感を抱くことは，第 1 章で述べた通りであるが，漸成理論においてアイデンティティの確立は第Ⅳ段階の老年期にまで重要な立ち位置を示している．つまり，青年期において「特定の他者」に信頼感を抱くことは将来的にもとても重要であると言えよう．また，アイデンティティの確立に寄与するだけではなく，指導者に信頼感を抱くことにより，高校野球部を離れた後も，指導者と良好な関係性を継続できるだろう．

これらを踏まえると，指導者は青年期に信頼感を獲得することの意義を理解し，部員の生涯発達的な面も視野に入れ，部員の指導者に対する信頼感に肯定的な影響を与えて安定化させることが必要であると言えよう．